

「眞実の宗教」 (十五)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

〈資料〉

いつつの不思議をとくなかに 仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということは 弥陀の弘誓になづけたり

(『高僧和讃』『聖典』四九二頁—B 13)

諸経に説きて言わく、^{のたま}「五種の不可思議あり。一つには衆生多少不可思議、二つには業力不可思議、三つには龍力不可思議、四つには禪定力不可思議、五つには仏法力不可思議なり。この中に仏土不可思議に二種の力あり。一つには業力、謂わく法蔵菩薩の出世の善根と大願業力の所成なり。二つには正覚の阿弥陀法王の善く住持力をして撰したまうところなり。」

(『教行信証』「真仏土」『聖典』三一五頁—L 13)

弘誓のちからをかぶらずは いずれのときにか娑婆をいでん

仏恩ふかくおもいつつ つねに弥陀を念ずべし

(『高僧和讃』『聖典』四九七頁—A 25)

一 弥陀みだの誓願せいがん不思議ふしぎにたすけられまいらせて、往生じやうじやうをばとぐるなりと信じて念仏ねんぶつもうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取せんしゆ不捨ふしやの利益りやくにあずけしめたまうなり。弥陀みだの本願ほんがんには老少らうしやう善悪ぜんあくのひとをえらばれず。ただ信心しんじんを要ようとすとすべし。そのゆえは、罪惡ざいあく深重じんじゆう煩惱ぼんのう熾盛しじやうの衆生しゆじやうをたすけんがための願がんにてもします。しかれば本願ほんがんを信まぜんには、他たの善ぜんも要ようにあらず、念仏ねんぶつにまさるべき善ぜんなきゆえに。惡あくをもおそるべからず、弥陀みだの本願ほんがんをさまたぐるほどの惡あくなきがゆえにと云々

（『歎異抄』『聖典』六二六頁—L5）

註；誓願せいがん

阿弥陀あみだ仏ぶつが因位いんゐの法藏ほふざう菩薩ぼさつの時に、生きとし生ける者を救すくいたいと願ねがひ、成就じゆうじゆしなければ仏ぶつに成ならないという誓ちかいをもなっているのが誓願せいがんという。

『宗祖親鸞聖人』発刊について

わたしたちは、いわゆる教団の内外を超えて、人間の魂たまの回復かいふを訴こえ、因習いんしゆのなかに埋没まいぼくしてしまっていた宗門しゆもんを、聞法者もんぽうしやの共同体くうたいとして形成けいせいしていくことを願ねがひとして、今日けふまで歩あんでまいりました。そして、その歩あみは、必然じぜん的に、真宗しんしゆの教法きやうぽうに遇あひ、目覚めめるとき、人はどのよう

な生きざまをなしていくのか、より端的にいえば、真宗の人間像とはどのようなものなのかを問うこととなりました。

もし、わたしたちの歩みのなかで、真宗の人間像が明確にならないままに終わりますならば、わたしたちの信心は、まさに『涅槃経』ねはんぎょうに説かれています。「ただ道あることを信じて、すべて得道とくどうの人あることを信ぜ」ないと、信不具足しんふぐそくの信にとどまることになるであらう。つまり、「得道の人」との出会いをぬきにすれば、真宗の教えは、わたしたちの身につかないこととなるのであります。

「得道の人」とは、本願念仏の教えの真実であることを実証していられる人であります。そして、その「得道の人」として、わたしたちにとつてもっとも具体的な名が、宗祖親鸞聖人しゅうそしんらんしょうにんであります。今日、いわゆる親鸞ブームと呼ばれるほどに、文化人や知識人によつて、親鸞聖人についての論評・著作がつぎつぎと出版され、語られています。それらは、いろいろな思想・立場にある人が、その立場から親鸞聖人の人間像に光をあてられたものとして、現代人にとつての親鸞聖人の意義の幅広さをおのずとあらわしています。したがって、その親鸞ブーム自体は、たいへん喜ばしいことなのですが、しかし反面、それは、親鸞聖人についてのイメージを混乱させ、また、親鸞聖人の意義を、たんに人間的な偉大さという面においてのみ見ていくという問題をもっています。

標題を「宗祖親鸞聖人」としましたのも、実は、そのことを思っていることでもあります。ここに学ぼうとするのは、どこまでも、宗祖としての親鸞聖人でありま

す。しかしそのことは、決して親鸞聖人を絶対化することでもなく、また、教理にしばられたかたくなな眼まなこで親鸞聖人あおをみることでもありません。

宗祖として仰あおぐということは、文字どおり得道の人として出会っていくことでもあります。そして、その得道の人として出会っていくことは、その人との出会いにおいて人間としての生活のなかに、端的にいえばこの私のうえに、すでに道あることを信ずるということ在意味します。道あることの実証をみるということでもあります。

したがって、「宗祖親鸞聖人」を学ぶということは、そのまま、わたしの生き方、在り方が問われ、学ばれてくるということなのであります。

（「宗祖親鸞聖人」東本願寺出版部発行）

〈法話〉

昨年に引き続きまして 今年も法話を担当させていただくことになりました。二時三十分までお話しまして三十分座談をさせていただきたいと思います。

法話の資料としましてA四版のワープロで作ったものと、もう一つは『宗祖親鸞聖人』というテキストの最初の部分と二種類ございます。ご承知かと思いますが二〇一一年に親鸞聖人の七百五十回の御遠忌が勤まります関係で、七百回御遠忌の後に出了ました『宗祖親鸞聖人』というテキストがまた用いられることになりました。その最初に出ている部分をこのワープロでこしらえた資料の後の方に少しばかり本文のところを載せております。これからこのテキストをお使いになる機会があると思います。それで、この『宗祖親鸞聖人』発刊についてというところを讀んでみたいと思います。皆さんもどうぞご一緒にお読みください。

『宗祖親鸞聖人』発刊について

わたしたちは、いわゆる教団の内外を超えて、人間の魂の回復を訴え、いんしゅう因習のなかに埋没してしまっていた宗門を、聞法者の共同体として形成していくことを願いとして、今日まで歩んできました。そして、その歩みは、必然的に、真宗の教法にあ会い、目覚めるとき、人はどのよう

な生きざまをなしていくのか、より端的にいえば、真宗の人間像とはどのようなものなのかを問うこととなりました。

もし、わたしたちの歩みのなかで、真宗の人間像が明確にならないままに終わりますならば、わたしたちの信心は、まさに『涅槃経』ねはんぎょうに説かれています。「ただ道あることを信じて、すべて得道とくどうの人あることを信ぜ」ないとこのころの、信不具足しんぶくそくの信にとどまることになるのでありましょう。つまり、「得道の人」との出会いをぬきにすれば、真宗の教えは、わたしたちの身につかないこととなるのであります。

「得道の人」とは、本願念仏の教えの真実であることを実証していられる人であります。そして、その「得道の人」として、わたしたちにとつてもっとも具体的な名が、宗祖親鸞聖人しゅうそしんらんしょうにんであります。今日、いわゆる親鸞ブームと呼ばれるほどに、文化人や知識人によつて、親鸞聖人についての論評・著作がつぎつぎと出版され、語られています。それらは、いろいろな思想・立場にある人が、その立場から親鸞聖人の人間像に光をあてられたものとして、現代人にとつての親鸞聖人の意義の幅広さをおのずとあらわしています。したがって、その親鸞ブーム自体は、たいへん喜ばしいことなのですが、しかし反面、それは、親鸞聖人についてのイメージを混乱させ、また、親鸞聖人の意義を、たんに人間的な偉大さという面においてのみ見ていくという問題をもっています。

標題を「宗祖親鸞聖人」としましたのも、実は、そのことを思っていることでもあります。ここに学ぼうとするのは、どこまでも、宗祖としての親鸞聖人であります。

しかしそのことは、決して親鸞聖人を絶対化することでもなく、また、教理にしばらくかたくなな眼まなこで親鸞聖人あおをみることでもありません。

宗祖として仰あおぐということは、文字どおり得道の人として出会うということであります。そして、その得道の人として出会うということとは、その人との出会いにおいて人間としての生活のなかに、端的に言えばこの私のうえに、すでに道あることを信ずるということ在意味します。道あることの実証をみるということでもあります。したがって、「宗祖親鸞聖人」を学ぶということとは、そのまま、わたしの生き方、在り方が問われ、学ばれてくるということなのであります。

こういう書き出しでこのテキストが始まっておりませんが、どういうわけかここ何年かはこのテキストが使われていなかったわけです。ところが御遠忌が近づきましたので、また内局の方で協議がまとまったのだと思います。このテキストをさらに深く学ばせていただくと言う動きが出てまいりました。それで、今日はそういうことも関連しましてしばらく聴いていただきたいと思います。

得道とくどうの人とはつまり浄土真宗という教えを実践され、自分が真つ先に救われ喜びの生活をしておられる方、易しく云えばそういうことです。学者が仏教を研究してこういう教えだと知識的に述べているのとは違うわけです。大体、今日仏教学というのは文化科学の一部門として学ばれる場合が多いのです。徳川時代の末から原典研究ということがはじまりまして、現在日本に伝わってきているお経は、いつ頃できたのか、またどういう内容をもって構成されているのかなどを研究する学問がなされていまして、その結論としてこれは釈尊がお説きになったことそのままがお経になっているのではないと。これは何百年か後にインドで作られたものであつて、ことに大乘仏教というのは釈迦仏の説ではないという研究発表がなされました。つまり大乘経典は後になつてできたもので仏説ではないのだという説が発表されて、非常に問題を起こしたわけです。従いまして我々真宗に限つて考えますと親鸞聖人がまさしく依り所にしておられます『大無量寿経』も仏説ではないのだと云われて大変な混乱を招いた時期がございました。そういう文化科学としての学者の研究ということではなく、『大無量寿経』を真実の教えとして自分が受けて救われていく、また事実救われて喜びの生活をしていられる方の代表者が親鸞聖人である。そういう意味で得道の人。道を得た人。道を得た人というは「ここに道あり」というだけではなく、その道が実践させていたでいて、たすかりましたということを明瞭にしてその喜びを多くの人に伝えてこられた人。また、亡くなられてからもその宗祖親鸞聖人の大きなお仕事がずっと何百年も

続いているということです。なお、それは、私が実父から聞いた話ですけれども、明治四十四年に今から約百年前ですね。明治四十四年に親鸞聖人の六百五十回忌の法要が勤まった。その時の総理大臣が桂太郎（一八四八〜一九一三）という陸軍大将であった、その桂太郎さんが聞法というわけではないのですが、ご挨拶ということで東本願寺の本堂で一席の話をされた。その中に、こういうことがあったそうです。源頼朝と親鸞聖人はほぼ同じ時代の人である。今日源頼朝の墓がどこにあるかということを知っている人は殆どいない。しかし、親鸞聖人は亡くなってから六百五十年もたった今日このような盛大な法要が勤まると言うことは不思議なことであります。こういう挨拶をされたそうです。私はその時はまだ生まれておりませんのでその時本願寺にお参りをした父親からその話を聞きました。なるほどそれは常識から云えば不思議なことでしょう。つまり権力の頂点にいた人が六百五十年も経てば、どこに墓があるか分からないような状態。ところが、生前には日本国中の人が知っていたというわけではなく一部の関東の門弟とか京都の門弟が存じ上げていただけの親鸞聖人が、亡くなって六百五十年も経ってからこのような盛大な御遠忌が勤まるということは、それは常識からいってたら非常に不思議なことなのであります。それは何かと申しましたら、結局その得道とくどうの人親鸞聖人のお仕事はたらが亡くなってからずっと続いているということです。それは親鸞聖人の残されたお言葉が我々を救われるという。その救いのもとが南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏という言葉になった如来の用はたらきを自分自身の上に深く頂いて

我々凡夫はここでなければ救われないのだということを、身をもって深く体験して、我々にその道理を『教行信証』を主として、また、他の聖教などで伝えて下さった。その道理を『教行信証』なり仮名交じりの『聖典』の言葉を、後に続くものが了解して念仏の救いを求め、伝道してきたという歴史があるわけです。歴史の中で我々は真宗門徒として生かしていただいているわけでございます。ここに真実の宗教という題がでておりますが、真実の宗教というのは時代が変わっても変わらない。また、世の中の状態がどのようなになっても、我々の救いがここにあるということがきちつとはつきりする。そしていわゆる迷信邪教というものに惑わせられないような人間になるというわけであります。それは『歎異抄』第七条によりますと「無碍の一道」ということです。無碍の一道とは平たく申しましたならば、今まで障りを感じてきたことが障りにならないような世界を会得させていただいて、その道を一生涯貫いて歩ませていただくということが無碍の一道です。無碍とは障りがないということ。我々普通の人間は教えを聞かないで暮らしている時はどういう暮らしをしているかということ、三毒の煩惱の暮らしをしているわけです。貪りと怒り愚かさ、この三つの煩惱で生活をしていまして、毎日の生活は非常に不愉快である。行き詰った。先が見えないとか。そういうような嘆き。また、何をしても虚しい。それは自分が人間として生きていくことの本当の意味がわからない。何をしてもその時だけはちよつと嬉しいような気がするけれどふと我に返ると虚しい。孤独感ということがあります。孤独というのは一人で離れ小島に

生きて一人暮らしをするというような意味ではございません。たくさん一緒に暮らしている、お互い助け合って暮らしているようだけれどもふと我に返ると本当に自分の人生の意義を確かに教えてくれる人に遇えない。そういう意味での孤独。もつと具体的に申しますと夜目が覚めてじつと考えると、自分が今までどういう具合に生きてきたのか。あるいはこれからどういふ具合に生きていくのかを考えてもわからない。誰に聞いてもそういうことは教えてもらえない。そういうことです。

それともう一つは今日の時代の特徴ですが、科学は発展するのだ。発展する科学によって人間はもつと幸福になれるのだという考え方はあるが、事實はそうでない。たとえば戦争ということをとって考えてみましても、二十世紀は戦争の世紀であった。世界中で一億人の人が何らかの形で戦争によって命を失った。二一世紀は絶対に戦争などあつてはならないという気持ちを世界中の人がもっていたに違いないと思います。ところが二〇〇一年に同時多発テロが起りましてアフガニスタン、イラクにアメリカの武力行使が行われて今日にいたっております。イラク戦争だけでもアメリカ人の兵隊が三千人、イラクの民衆がその十倍以上も亡くなっている。あれだけの二十世紀の悲しみがあつたにもかかわらず、戦争をやめることが出来ないような状況になつており、どこの国も新しい科学兵器でもつて作り出して人殺しの道具を充実させているような状態です。こんな大きな矛盾です。だけど科学が発展すれば人間は幸せになるのだというような考え方

が一般的に行われているというわけです。仏教とこの考え方を対比してみますと、仏教は流転輪廻といえます。迷いの生活をしている我々はいつとも同質の迷いの世界をぐるぐると回っているという。発展ということは平たく云うと段々我々人間にとつて都合がよくなり自分が幸せになるということでしょう。そういう考え方と仏教で云う流転輪廻とは全然違います。流転輪廻とはどれだけ世の中が科学的に進んでも迷いの世界からは一步も踏み出すことが出来ないで皆苦しんで生きており。そして、この世に人間として生まれてきた深い意義がわからずに命を終わってしまふ。そのような状態が昔も今も変わらない。そういう迷いからです。そういう迷いからどうしたら解放されるのか。こういう問題です。仏教の大きな問題はそこにあります。それで私は浄土真宗の教えは南無阿弥陀仏という言葉の用きはたらで私たちが流転輪廻のわだちから解放される。私は浄土に生まれ成仏するという意味をもってこの世に生まれさせてもらったのだ。ということがはっきりわかる人間になる。この世を長生きしてよりよく楽しんでいこうという考え方から、我々は往生成仏という精神生活をはつきりとさせていたために言葉のわかる人間に生まれたのだと頷けるようになる。そういう意味での迷いからの解放です。それは南無阿弥陀仏によつてできる。間違はなく出来るのだということを親鸞聖人が実証された。今から七百五十年も前に実証されてそのことを浄土真宗として残してくださった方が親鸞聖人です。こういうことです。それなのに親鸞聖人の深い思想なり信心なりを我々がなかなか聴こうとしない、煩惱に振り回されて聴こうとしな

いものが、ご縁があつてその教えを聴かせていただいて目覚めた人が親鸞聖人のご恩を感じるわけです。そのご恩報謝ということが私たちの大事な生きる意味なのだということを端的にあらわしているのが報恩講でしょう。また、御遠忌は勿論のことです。毎年勤まるところの報恩講は聖人の精神生活を教えてくださったお恵みを深く感謝して自分も親鸞聖人と同じ得道とくどうの人、道を得た人にならしていただかなくてはならないという心でお勤めをするのが報恩講でございます。

それで毎年お話を申し上げておりますが、この仏恩ということとは仏の恵みということですが、その恩は願恩と教恩という二つに分けて味わうことができるわけでございます。願恩とは本願のご恩です。本願と本願成就のご恩。教恩は釈尊を始めとして七高僧、また、ずっと親鸞聖人の後もいろいろな善知識が我々に教えを伝えていただき、我々に恵んで下さった教えのご恩を教恩という。願恩と教恩が別々にあるわけではございませんけれども、教えの恩のもう一つ根本にあるのが願恩、本願の恩です。これは、願といつても普通の我々の願いとは違うわけであります。仏が悟りの世界から全ての人にこの救いの道を歩んで救われてもらいたいという大きな願いをかけておられるのです。現代語で申しましたら如来の祈りと申しても差し支えないと思います。我々の祈りというのはちっぽけな自分の幸福だけを祈る、あるいは自分の家族の幸福だけを祈るというだけの場合が多いが、如来の祈りというのは全ての人が平等にたすかる。平等に本当の意味で明朗な生き方ができ、明朗な死に方のできる道を心得てもらいたいというお心で願を起こさ

れた。これが如来の本願です。親鸞聖人からこう教えられているわけです。その元が南無阿弥陀
仏であります。私の師匠である曾我先生は「『大無量寿経』に先立って本願あり。本願に先立っ
て名号あり。」という言葉を残しておられます。「大無量寿経」というお経に本願が説かれている
が、『大無量寿経』があつて本願があるのではなくつて本願があつて『大無量寿経』が出来てい
る。また本願は誰かが作ったというものではなくて南無阿弥陀仏という言葉の用きはたらの意義内容と
しての本願です。南無阿弥陀仏という言葉になつて我々を救われる言葉の如来といえますか、言
葉になつた仏の弘大なお心を本願としてあらわされた。「大無量寿経」に先立って本願あり。本
願に先立って名号あり。つまり浄土真宗は南無阿弥陀仏から始まつた仏教の歴史です。親鸞聖人
はそれを体得された。釈尊から始まつた仏教の歴史のもうひとつ、奥にあるものです。仏教は釈
尊から始まると云うのは常識です。仏教の始まりはお釈迦様だと、こういうのですが。お釈迦様
がお説きになつた『大無量寿経』には、その過去に五十三仏がおられる。その五十三仏の最後に
世自在王仏という方がおられて、世自在王仏の弟子として法蔵菩薩が聞法されたのだと述べられ
ています。つまり釈尊以前の仏教と云いますか、こういうことを云いますと非常に頭が混乱する
と云う人がありますが、表面的に云いますと釈尊が説かれたことによつて仏教は始まつているの
だけけど、釈尊をして釈尊たらしめ、釈迦をして『大無量寿経』を説かせた背景がある。その背
景の一番根本が南無阿弥陀仏。これをもう少し易しく申しましたら、この地球上に生き物が沢山

いますが言葉の分かる生き物は人間だけです。動物も多少は分かるということもあります。私は旧軍隊の騎兵ですので、馬を扱わされ、嫌で、嫌で仕方がなく扱わされて馬にいつも餌をやったり水を飲ませたり、背中をこすったりしていました。馬の手入れをしていると手入れをしてくれたい人の声がかかる。それで「おーらおーら」というと喜んでくれるような格好をするので少しは言葉が通ずるといふこともあります。昔から人馬一体と云います。「鞍上人無く鞍下馬無し」といふことがあつて、馬と人間が一体となつているのだということが云われています。多少は人間と馬とが通じ合えることがあります。ところが言葉が分かるのは人間だけです。それから、もうひとつ人間だけは自分は死ななければならぬものだということを知っている。つまり死を知っている。ところが、人間以外の動物も死んでいくのだが、死を知つて悩むということはないのです。人間は言葉が分かると同時に死の問題を持つていて、死の問題をさげられぬ人間が迷いを超えて生きようという根本的な要求が我々人間にだけある。誰にでも皆そういう要求がある。浄土真宗は言葉が分かる人間が言葉になつた仏によつて救われていく仏法です。凡夫も聖者も、男も女もそんな差別や区別はない。すべてのひとがこの南無阿弥陀仏の深い意義を受け止めることができる。こういう精神的な内容を持つて生まれてきている。ところがそれが煩惱におおわれて開発されないで終わってしまう人もいる。この頃はニュースを聞きますととんでもない殺人事件がございまして、幼児がまったく関係のない人に玄関先で殺されたとかいうような

ことまであって、どうしてこういうようなことがあるのかと私は自分の耳を疑うほどなのです。我々、そういう命を大事にしましょうとか、命を大切にというフレーズでもって命の尊さを強調されている反面ですね、軽々と命が失われていくような時代状況になっている。日本は一九四五年から今日まで戦争というものがないわけですけども、しかしながら社会の中ではそういった殺人事件が増えてきているということを見れば我々が命を大切にという言葉だけではどうにもならないひとつの大きな迷妄といえますか迷いを抱えて生きているということ。『歎異抄』の十三条の言葉で申すなら、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」というそういう迷いを我々は身に備えているわけです。そういう我々を全て間違はなく救おうという用はたらきが南無阿弥陀仏という言葉になった如来の用はたらきであるということ。この南無阿弥陀仏の意義を日本で完全に教えてくださった方が親鸞聖人である。その親鸞聖人の教えの出てくるものは法然上人にあります。また法然上人の教えは中国の善導大師に依っているのです。この教えの伝承を受けて南無阿弥陀仏で救われることはどういうことなのかをはつきりと示してくださいました方が親鸞聖人です。これを一言で云えば私たちの執われ心の深い、またこの悩み苦しみをいつも感ぜざるを得ない生活をしている私たちに、言葉になった如来が常に用はたらきかけてくださっている。この如来の用はたらきを私一人のためなりといただけるようになることが、私の救いだということです。それは具体的に申しますと自分の思いがひるがえっていくという。時には幸せだと思ったり、時

には不幸だと思ったり、時にはお蔭様だと思ったり、孤独だと思ったり、いろいろその時その時の条件で人間の思いは変わっていく。心はくるくると動いている。どう心が動いた時にも、善い心が出た時も悪い心が出た時もすべてこれは南無阿弥陀仏という言葉で最後の依り所として生きなさいという大きな思し召しだという具合に受け止めて生きられるようになる。

『聖典』に関連して申しますと、皆様方がいつもお勤めしておられる、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。『正信偈』はそこから始まっております。「如来所以興出世」は後から出てきます。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まっております。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」ということは南無阿弥陀仏ということです。我々を完全に救いとうとう仏のお心であると同時にこの如来を最後の依り所として生かしていただけることになりました。ありがとうございませうという心が「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句の中にちゃんと内含されている、含まれているわけです。難しい言葉で云えば、法の用はたらきと機の救いがこの「帰命無量寿如来 南無不可思議光」という言葉になって『正信偈』が始まっている。寿命の計り知れない永遠なる救済活動はたらしておられる言葉になった仏を最後の依り所として、究極の依り所として生きなさいという用はたらきかけが南無阿弥陀仏であると同時に、その用はたらきかけによって私はこの信心をはっきりさせていただき本願が究極の私の依り所だということが頷かせていただいております。ありがたいこととございませうという意味もちゃんと含まれているわけです。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。南無はイ

ンドの言葉ですが、それは「ナモ」とか「ナマス」というインド語であります。それが中国にきて「南無」という字にあてられた。南無という字そのものには意味がないのでして、「ナモ」とか「ナマス」というインド語の言葉のものは「屈する」、「礼をする」とかというような原語的意味があります。それがだんだん教えとして深まっていきまして、如来の命に従って我々が目覚めて生きるという意味が出来てきたわけです。「帰命無量寿如来」、命はかりなき仏を究極の依り所として生かしていただきます。また我々の思いでは到底思いが及ばないような「不可思議光」、我々が考えても考え及ばないような光に遇わしていただいて私の闇が破れていきます。そういうことでございます。

話を少し変えますが、昨日私は鹿児島から東京に来たわけですが、台風が接近しておりまして飛行機が飛ばずか、飛びましても羽田にうまく着けるかという心配をしながら少しでも早く出たほうがよからうと思つて鹿児島空港を一時十五分の日航機で出てきたわけです。途中上空では揺れなかったのですが、東京に着く前に揺れました。だけど、なんとか台風にあわずに着陸できました。まあ、そういうことを通して、龍力不思議ということがお経の中に出ているのを思いました。五つの不思議です。龍力不思議というのは「りゅう」というのは想像上の動物の「龍」です。氣象天候の不思議です。なぜ台風が南の海で発生して北向いてくるのか氣象解説者の説明を聞いてもよく納得できないのです。台風がここで起こりました。それが現在こちらの方向に動いていま

すということとは解説するけれど何故台風ができて北に向いてくるのかはつきり分からない。今でもそうなんですから昔の人は大変不思議だったと思います。そういうのを龍力不思議と云い、龍の力で気象天候が変わるということを云った。それが五つの不思議の中の最初の一つなのです。五つ説かれている不思議の中の最後の仏法力不思議、仏法力不思議とはどういうことかと云ったら、具体的に申したらたすかるはずのない人間がたすかる。目覚めるはずのない人間が目覚めさせていただけるということが仏法不思議という。これはご『和讃』を平素ここの例会で味わっているのですが、曇鸞大師の『和讃』の中に

いつつの不思議をとくなかに

仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということとは

弥陀みだの弘誓ぐぜいになづけたり

という一首（『聖典』四九二頁中段13）があります。これは非常に大事な『和讃』だと思えます。仏法不思議とは本願力の不思議ということですが。本願力の不思議ということは如来の大きな本願はたらの用きで我々救われるはずのないものが救われる。つまり安定した精神生活の出来ないものが、

いつも心がぐるぐる動いて苦しんだり悩んでいるものが、南無阿弥陀仏に遇って安定した明朗な精神生活ができるということです。平たく一般語でいったらそういうことです。それが仏法不思議です。浄土真宗は釈尊から始まった精神統一中心の聖道門仏教とは違うのです。精神がいつも統一されていない、感情も意思も統一されていない我々が南無阿弥陀仏によって安定した精神生活ができるということを説いていただいているのが『大無量寿経』であり、その『大無量寿経』のことは本願であり、本願のことは南無阿弥陀仏である。南無阿弥陀仏から始まった仏教が浄土真宗。こういうことを私は曾我先生から聴かせていただいて、自分がなんということもなく、瞬間的に称えている南無阿弥陀仏もそういう深い歴史的背景があるということに気付かせていただいたわけです。そういう深い背景のある南無阿弥陀仏によって救われていく道理を説かれたのが親鸞聖人の『教行信証』です。その教えがきわめて深いから、我々愚鈍には良く分からないところでは。ところが、『教巻』を見ていただくとはっきり書いてあります。一五二頁の六行目です。

「この経の大意は、**弥陀**、**誓**を**超発**して、**広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施**することをいたす。**釈迦**、**世に出興**して、」とあります。それでまず最初は「**弥陀**、**誓**を**超発**して」というそこから始まっているのです。釈尊から始まる聖道門仏教と南無阿弥陀仏から始まる浄土真宗、この違いがはっきり親鸞聖人によって顕かにされた。私たちが何気なく称えている南無阿弥陀仏もそのもとは人類がこの世で言葉を用いて生き始めた時からずっと私たち

を目覚まし続けてくださった言葉である。平たく云えばそういうことでありましょう。

弥陀成仏みだじょうぶつのこのかたは

いまに十劫じゅうこくとときたれど

塵点久遠劫じんてんくおんこくよりも

ひさしき仏ぶつとみえたまう

（『浄土和讃』 『聖典』 四八三頁下段5）

「塵点久遠劫じんてんくおんこく」とは塵ちり一つくらいの大きさにしか見えないずっと昔、人間がこの地上に言葉を使つて生活し始めたころからずっと我々を目覚まし続けてくださった言葉が南無阿弥陀仏である。この南無阿弥陀仏という言葉は釈尊が作られた言葉ではありません。これは真実の道理（真如じねん）が自然じねんに南無阿弥陀仏という言葉になつて用もちいている。真言宗は「南無大師遍照金剛」と唱え、日蓮宗は「南無妙法蓮華経」と唱えるでしょう。これらはごく短い歴史しかないので。 「南無大師遍照金剛」とは弘法大師空海が中国の恵果和尚けいかにしやうから法を伝えられ、ただだかれた名が「遍照金剛」です。弘法大師に帰命し奉ると弘法大師を依り所にして生きますという言葉が「南無大師遍照金剛」でこの言葉は日本の平安時代からこちらへの歴史があります。それから「南無妙法蓮華経」というのは日蓮上人が作られた言葉です。長い『法華経』を読まなくても「南無妙法

華經」を唱えれば『法華經』を読んだのと同じ功德があるということ。「南無妙法蓮華經」という言葉を日蓮上人が作ってこの言葉を唱えるよう勧められたのです。七百何十年かの歴史がります。ところが南無阿弥陀仏は誰かが作ったというものではありません。これは本当に人間の常識を超えた永遠の言葉です。釈尊が作られたわけでもありません。法蔵菩薩はこの言葉を私が選ぶとってそして私が本願を起し浄土を莊嚴したいとおっしゃった。ですから南無阿弥陀仏がまずある。その南無阿弥陀仏という言葉が我々が勝手に解釈してしまっている。死ぬ前に、どうしようもない時に称える言葉だとか、あるいは死者を送る言葉という具合に勝手な解釈をしてしまっている。南無阿弥陀仏は本当は広く深く高い言葉なんだけれど、その言葉を人間の思いで小さく低くしてしまって、そうして念仏なんか称えなくてもいいのだとか、念仏を称えるのは年寄り臭いと、南無阿弥陀仏を軽んじてしまっているのが現状です。そういう現状で我々は不思議な縁で親鸞聖人の教えに遇わせていただいて、その教えの中で南無阿弥陀仏という言葉の不思議な用はたらきを感じさせていただくように一生懸命聞法はたらさせていた。単に南無阿弥陀仏が永遠だということではなく、南無阿弥陀仏の永遠なる用はたらきで私が救われていますとすることを深く喜べる人間になる。ますます深く喜ばせていただきたい。そういう意味で毎日聴聞させていただくと同時に、また一年に一度報恩講をお勤めさせていただくのであります。また五十年に一度の御遠忌をお迎えするのもそういう気持ちでございます。

〈休憩〉

それではもうしばらく聞いていただきます。

南無阿弥陀仏という言葉の用きではたらかどういう精神的ひるがえりができるのかということが我々にとって大きな課題でございます。それは先ほどこよつと触れましたように浄土という精神の世界を感じ取るようになることです。浄土という言葉も大変な誤解が長い間続いていて、なんか我々が死後に行くところの冥界だというふうに思っている人が多い。また、我々人間の常識ではそんな世界は考えられない。分からない世界だと一般的に考えられているようです。浄土というのは如来によって開かれた光の世界、光明の精神界でありそれは現代語で云いましたら絶対自由・絶対平等・絶対平和の世界と云って差し支えないと思います。私たちは自由を得ようとしているが自由が完全に得られているわけではない。平等、平等という掛け声は大きいのだが人間は完全に平等というわけではない。いろいろな差別や区別の中で苦しんでいる。平和の問題は先ほどお話し申し上げましたがどれだけ平和、平和と云っても戦争が次から次と起こってくるような世の中。そういう世の中を穢土と申します。穢土とは不純粋な世界です。「穢」とは汚れがついていると

いうことではなく、浄土に対して穢土。穢土とは不純な世界。不純な世界の中に我々は生きておりながら、不純な世界をより不純にしているような我々でありながら、南無阿彌陀仏に遇うことによつて純粹な如来の世界、如来の開かれた純粹な世界、精神界を知らせていただくことが出来る。それは死後に行く世界というのではなく、現に我々が南無阿彌陀仏を深く信ずることが出来るようになった時に私の上に開かれてくる光明の世界である。私の上に感知されることの絶対平等の世界である。いわゆる科学的な客観的証明が出来るというようなことではないわけでありまして、我々一人一人の上に教えを聞くことによつて開けてくる世界。その世界が分からない人には全く感じ取れない。ところが人間は先ほど申しましたように言葉が分かると同時に死を恐れる心を皆持つており、恐れないといつても最後は死ななければならぬということを知っている、身体の命が終わつても終わらない永遠の世界がある。そういうことです。浄土というのはそういう精神の世界。その世界を会得した人は根本的に明朗、明朗とは性格的に明るいとは違います。暗くなる要素は持つていても、それがきっかけになつて明るい世界が私に味わえるようになる。理屈っぽく云えばそういうことでしょう。それは南無阿彌陀仏はたらという言葉の用きはたらによらなければ得られない。これが法然上人・親鸞聖人によつて開かれた浄土真宗。浄土真宗は一般的に云えば親鸞聖人が立教開宗された、立教開宗の根本『聖典』が『教行信証』であるという事になつていのですが、親鸞聖人のお書きになつたものを読めば、法然上人がおられて始

めて南無阿弥陀仏という言葉の用きを感じ取れるような私にさせていただいたのだ。天台宗の教えではどうにもならなかった私が法然上人にお会いして初めて南無阿弥陀仏という言葉の用きで救われつつあるということを感じとる人間になった。こう親鸞聖人がおっしゃっておられますから、浄土真宗は法然上人と親鸞聖人がお二人で共同して開かれた一宗であると言って差し支えないと思います。また、偶然の一致と申しますか法然上人の八百回忌と親鸞聖人の七百五十回忌が同じ年です。両聖人の御歳は四十違いで、親鸞聖人が法然上人より十年長く生きられたから、御遠忌に五十年の差があるが、親鸞聖人の七百五十回忌の二〇一一年が法然上人の八百回忌です。ともかく法然上人と親鸞聖人との共同で浄土真宗という一宗が開かれた。その一宗の根本は南無阿弥陀仏である。『浄土和讃』を見れば帰命せよ、帰命せよとお言葉が続いています。あれは如来が私に呼びかけてくださっている、呼び覚ましてくださっているお言葉である。阿弥陀如来に帰命せよ、帰命せよというのはあなたの究極的な依り所として、あなたは本願を信じ念仏申す根本の精神生活をはつきりしなさいという呼び覚ましに南無阿弥陀仏である。それを受けとめて帰命せよ、帰命せよといつも如来の呼びかけを親鸞聖人一人の上に聞いてこられたわけです。あれは決して後輩に帰命せよと聖人が教えられたものではありません。如来から私に帰命せよ、帰命せよといつも呼び覚ましておってください。聖人はそう深く喜んで『浄土和讃』の『讃阿弥陀仏偈和讃』四十八首を作られた。親鸞聖人は二十九歳の時法然上人に遇われてからずいぶんいろいろ

大変な事件にあわれた方です。それはまず第一に流罪でしょう。越後に行かざるを得なかった。越後から関東に移られたのはどういうわけだかよく分からないけれども、おそらく越後の農民の人たちが耕作面積が小さいところから、関東へ開拓にいくという動きの中で、親鸞聖人も一緒に関東に行かれたのではなからうかという説があるわけです。それから、もう一つ大きなことは八十四歳にもなられてから、長男の善鸞を義絶せざるをえなかった。義絶とは親子の縁を切るとういことです。大きなものをあげても、それだけ我々がちよつと普通体験できないようなことを体験せざるを得なかった方が親鸞聖人です。そういうことは全て如来に帰命せよという大きな用はたらきを私はこういう事件でもつていよいよ明らかに信ぜざるを得ないようにしていただいているのだということをおっしゃっています。そういう親鸞聖人の宗教体験、真宗の用語で云えば信心の深まりということでしょう。それを私たちは一部分なりともこの命のある間に自分のものとして追体験させていただく。そこで仏の本願の意義を自分一人がためと聞いて私たちはたすかっていく。そういうことが親鸞聖人の教えをいただいて得道とくどうの人となるということです。今日この『宗祖親鸞聖人』というテキストが再び用いられるようになりまして、その意味を改めてうかがったわけでありませう。道ありと信ずるだけでは不十分であって得道とくどうの人ありと信ずることは大事なことだということが『涅槃経』に出ている。それが『教行信証』（『聖典』三五二頁）の中に引用されている。その得道とくどうの人ということは道をちゃんと心得て私たちが迷わない生活をさせ

ていただくようになるということでしょう。それを一言で言えば無碍の一道が我が身の上に成り立つことだと私は了解させていただいております。以上で話を終わらせていただきます。

〈座談〉

司会

トップバッターはいつも櫛先生のお話を聞いていらっしやる方をお願いしたいと思います。池田お兄さんいかがでしょうか。

池田

大変有意義なお話ありがとうございます。「無碍の一道・南無阿弥陀仏」よく教えていただきましたありがとうございます。以上です。

住職

皆様にご紹介いたします。私の大事な、大事なお兄様でございます。十四歳年が違います。私は五男ですがお兄様は次男でございます。長男も生きております。皆怖いお兄様でしたが、一番下の私がお兄様に文句を云うのは幅ったいのですが、皆様の前でひとつ文句を云わせていただきたい。櫛先生に聞いていただきたい。私の兄弟は六人です。私の人生の前の時代、社会的活動を前世ぜんせといつて、今の僧侶としての宗教的生活を現世げんせと云っているのですが、前世と現世の中で兄に深く、いろいろと非常にお世話になったのです。不思議なんですよ。兄弟でもこんなに波長が合うのは。ところどころ雑音があるのは問題ですけど、多くは通じるのですが、雑音がはいるのです。その雑音部分をちよつと申し上げてみます。致命傷ではないかと思うので申し訳ないと思うのですが話します。兄はよく聞法してくれるのです。先生の話もよく聞いてくれた。しかし、先生

から云われた一言で引っ込んでしまったのです。私怒ってしまいました。先生がなんて云ったか覚えていますか。私の兄に先生がひとこと云った言葉。彼は八十歳になるのです。心が傷ついているのです。先生のひとこと、先生は忘れているのではないかと思えます。先生覚えていますか。

櫟先生
なんて云いましたかね。

住職
人が傷つくことは、本人が発しているものは忘れてしまうのです。受けたものが傷つくのです。こういういい事例です。私の兄が先生に何か質問したら、「仏教インテリ」と云われた。

櫟先生
ああ、そうでしたか。

住職
それで、「私は櫟先生の会には出てこない」と。「仏教インテリ」といわれたと。東大出身の先生の話をちよつと聞きに行つて知識をひけらかすから、当然「仏教インテリ」と云われたのだ。それはあえて、賞賛と同時に「少し違うぞ、猛精進しろ」ということであり、「もう引っ込むとはなんだ」と云ったのです。このようにちよつとありがたいお兄様に文句云つたのです。精進していた兄が引っ込んでしまったのをどうしたら櫟先生の聞法会に出せるのか、先生、先生にも責任があるのですから。

櫟先生
ちよつとこれお身内のことでしてなかなか。

池田

ちよつと言いつけたしをさせていただきますと、しかられたとは思っていないです。褒められたと思っっています。インテリといいますが勉強しているが足りないのは信心が足りない。南無阿弥陀仏。無碍の一道を会得していないということだと思ひ、今一生懸命念仏を称え、無碍の一道になるように、知識的な勉強だけをしないようにつとめます。

住職

わかりました。

池田

今のはちよつと間違いで。兄だということから云いますと、皆様を紹介にもなるのですが、皆さんに思いをいたしていただきますと、十四歳離れた弟が坊主になる。お寺を建てる。これは兄として心配でしたよ。本当ですよ。こちらは本当に心配でして及ばずながらいろいろ面倒をみたつもり。でも最近、あと半年経つと八十歳の山が越えられるのですが、肉体も老化し認知症もあるのではないかと思ひます。また今まで心配してきたことがだいぶ心配しなくてすむようになりましたことを御礼申し上げて終わりにします。

住職

田中先生は先ほど「ろうけんぜんじょう 勞謙善讓」と云っていましたね。お世話したって、兄貴は弟にお世話して今度は心配しなくてだいぶ成長したって云っています。田中先生の「ろうけんぜんじょう 勞謙善讓」の話しをどう聞いたのか、お世話したお世話したと何かを要求してはいけません。そういう

ところが聞法が足りないと思うのですが。

池田

文句ととるからいけない。文句を云ったのではない、そういう事実をご紹介したに過ぎないのであって、最近安心をしているということをよく聞かなくてはと思います。

櫛先生

先ほどの仏教インテリということを私が申し上げましたが、まあ、現代人は知識を優先する傾向がありまして、それはテレビもできインターネットもでき、いろんなメディアによって色んなことを知っているのが、現代人のありさまです。ところが一番分りにくいことが「自己とはなんぞや」。これが一番分りにくい。「自己とはなんぞや」というわかりにくいことが本当に頷かせていただくことになるということが信心成就ということでございますよね。ですから、インテリになろうとしていること自体は何にも悪いことではないのですが、インテリではすまない問題があると。こういうことを私は申し上げた。自分自身がやはりインテリになろうとしておる傾向が大いにありますが、知識では救われません。やはり、信心の智慧ということです。「智慧光のちからより本師源空あらわれて」というご和讃がありますが（『聖典』四九八頁）法然上人は一代仏教を広く深く学ばれた方なのですが、その知識を決して振り回されなかつた。『一枚起請文』として最後に残された言葉に「たとい一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚どの身になして」（『聖典』九六二頁）というお言葉がございまして、そこがなかなか得が

たいことではないかと私は思っています。インテリが悪いというわけではございません。インテリでは出来ないことがあると。それが、他力の信心であるということをお申し上げています。

住職

義郎さん、櫟先生の言葉よく分かりましたでしょう。これから櫟先生の会にでますと。ここで「いいとも」とタモリ的に櫟先生の前で、皆の前で阿弥陀様の前で誓っていただきたいのですが。

池田

可愛い弟がそこまでいうのならそうさせていただきます。

住職

よかったね。櫟先生の仏教インテリで引っ込んでしまつて、報恩講はありがたいですね。ここで一人の人が復帰するというのはこれこそ報恩の誠ではないかと存じます。失礼いたしました。

櫟先生

それでは どうぞ。他の方。もうしばらくございます。

司会

岡田さんいかがでしょう。

岡田

はい、先生今日もありがとうございます。おかげさまで、法と機の深信ですね。そのお力で無碍の一道、本当に感じさせてください。日々感謝し、いつも護られていることを感じております。今日のお話も先ほどの平等というお話がありました。如来様から衆生に向かって平等ということを、如来様からいただいたというわけですね。

櫟先生

そうです。平等といつても我々は我執があるものですから、やっぱり自分が一番かわいい。他人は自分とは違うのだという根本的な考えがあるわけです。それを我執という。ですから、一般には生理的な差別や社会的、政治的差別はいけない。またそれが多少なくなりつつあるともいえるわけです。だがもう一つ根本にかえって、自分という執らわれの心で人を見ているという、そういう深い意味の差別。それが、あるということですね。それを自覚させていただく言葉が南無阿弥陀仏であると私は思っております。それでやはり家庭生活は、そういうことを一つ具体的に、自分の苦しみとして感ぜざるを得ないのが家庭です。どうしても自分中心にものを云ったりしたりする。家庭ではブレーキがはずれていますから、ワーツとなんとでも云うわけです。

そういつて時に自分が一番可愛いものですから、他を軽視したり憎んだりする。云えないけれどもそういう煩惱が起こってくる。それが浄土を願う縁になるでしょう。それは私たち凡夫の救いの契機です。聖道門の仏教では建前として家庭はもたないのです。現実には家庭をもっているお坊さんも沢山いるわけですが、建前は家庭を持たない、結婚してはいけない出家の仏教ですから、そういう問題を身近に感じてないわけです。ところが我々浄土真宗は家庭をもつてその家庭生活、家族の共同生活の中で自分の愚かさを感じさせていただく。そこに究極の依り所をはっきりさせていただくというのが浄土真

宗です。そこに差別の問題も一般的に云われている思想的な問題というところにとどまらずに、我執というものがあって他をみているというその愚かさを如来が私に照らして教えてくださる。そういう意味での絶対平等です。

山田

すみません。いままでの話と次元が違う話をして申し訳ないのですが、先ほど先生がこの世の中、悪いことが起きすぎると云っておられました、私も一人の人間として悩みがそういう面であります。たとえば私はその根本が浄土真宗を含めた日本人の仏教離れ、宗教離れにあるのではないかと。戦後いろいろ教育改革がありまして、教育の現場から宗教が離れまして、科学の発展などがあり、また、核家族化が進みまして、今その先端に、従来日本の家庭で守られていた宗教が切り離されつつあるわけです。そういう中で私自身を考えてみると、我々は大乗仏教ですが、大乗仏教といながらその大きな船に乗っているのは私の家族の中でも私一人しか乗ってないのです。周りを乗せることも出来ませんし、そういうことから益々いま政治家などもふくめて、バレなければ何をやってもいいのだという思想がはびこっているわけです。どうもこれから先、今の大人の背中を見て育った子どもたちがこれから十年二十年先になつたらとんでもない日本ができるのではないかという懸念があります。それともう一つ先ほど私、報恩講の出だしに挨拶したわけですが、この蓮如上人の『御文』の中で報恩講の間に自分を見直して新し

櫟先生

い自分を生きなさいとそのきっかけを作りなさいという話がありまして、それを我々もやらなければだめだと話したのですが、実際自分の家庭に真宗をどういう形で持つていつて、そのどういう形で家族にやればいいのか、勝手なことを云いながら、その具体性がない話をしました。その辺のことは質問なのかどうかよく分かりませんが、これについて考えていることを聞かせていただきたいのですが。

時代の流れと共に世界中の人が宗教離れになってきているということがいろいろなところで書いてありまして、日本人だけではなくヨーロッパ人もキリスト教から離れていると云われております。それは世界的傾向だと思えます。しかし、私はもう一つ思いますと、世の中は変転極まりない世の中でありますから、今の状態が必ずしも次の世代のものにこのまま続いていくとは限りません。また、これが反動となつて宗教を深く求めなければならぬという心を起こす人が増えてくる時も必ず来ると私は思っております。我々は今日一時期の状態だけを見て心配したり悲しんだりしますが、私はそういうことだけではないと自分で思っております。道德の問題になりますと、これは深い教育との関係がございまして、戦後、道德教育が充分になされなかつたために、今日のような状態になつてしまったことはこれは非常に悲しいことでもあります。単なる道德ではなくして、我々の最後の依り所をはつきりするということにおいて、それならば私たちはどう

いう生活をしたらいいのかというそういう根本的な意味を教える教育がどうしたら復活するのかと私は思っておりますが、私は今これ以上のことは申し上げられません。私も自分の息子や嫁と一緒に生活しております、ずいぶん我々の若い頃とは時代が違うなあということはあると思いますが、どうしたらそれが本当の意味における人間の自覚道というものを歩めるようになるのかということについてはちよつと私がこうだと今ここで簡単に申し上げることはできません。また今あなたがおっしゃいますような憂うべき状態がどこまでも続いていくとは思いません。時代というものは変転していく。ですから変転していく中で我々は変転の、変わり目を縁として、変わらない真実の教えを求めていく精神生活があることを先ず自身が深く信じ、多くの人にそれを伝えていかななくてはならないと思つてゐる次第です。

司会

田中

田中先生どうぞでしょう。どうも先生お久しぶりにお話を聞かせていただきまして本当に感銘しましてありがとうございますございました。

浄土というお話がありました。死んでからいく世界ではなくて、この生きてままでこの如来の光明の世界、絶対自由平等の世界、そういう世界に入らせていただく。そういうことです。往生浄土という言葉があります。往生浄土というのは死んでからいくという

ことではないのですね。

櫟先生

即得往生ということが親鸞聖人の教えの中心でありまして、本願成就文（『聖典』四四頁）のところでご承知のとおりですね、「即ち往生を得て不退転に住す」このところだと思えます。これを抜きにして親鸞聖人の教えはないと思えます。

また教えには方便ということがありまして、即得往生という世界を会得しないものには方便として死後往生ということが説かれています。しかしながらその往生というのは方便化土の往生であって、真実報土の往生ではないということです。親鸞聖人はその真実と方便とをはつきり教えておられるわけです。

田中

善導大師の言葉に「前念命終 後念即生」という言葉がありますね。これはこの現実の世界において古い自分が死んで新しい自分に生まれ変わるということですね。それが回心ということになりますね。

櫟先生

そういうことです。前念命終ということは長い間自分が迷い惑うてきた生活が終わりを告げて信心が得られたときに新しい浄土の精神生活が始まる。聖人は「前念命終 後念即生」、それは信の一念をそのように二つに分けて教えられる。これが『往生礼讃』における「前念命終 後念即生」であると了解しております。それは、『聖典』の『愚禿抄』の上巻の終わりのほう、四三〇頁の後ろから五行目です。『本願を信受するは、前念命

終なり。「すなわち正定聚の数に入る。」ここで切れて、即得往生は、後念即生なり。「即の時必定に入る」「また必定の菩薩と名づくるなり』』となりませす。ちよつとこの『聖典』は印刷が間違つてゐるのです。これは「即の時必定に入る」といふのは「即得往生は、後念即生なり。」とあるその下にゐるのです。ですから、そういう意味で「前念命終後念即生」といふことを親鸞聖人は死後のことではないのだ。命終とは身体の命が終わる時と誤解しやすいけれども、そうではなく長い迷いの命が終わりを告げて（前念命終）、新しい目覚めの精神生活が始まるということが後念即生と教えられた。そのことがはっきりとすることが我々浄土真宗の教えを聞かせていただいたものがたすかるといふことで、「信に死し願に生きん」と曾我量深先生が教えてくださったのが、そういうことです。先生もう一つ、私本願寺派の教えも聞かせてもらつていまして、そのお西では往生をどうも肉体が死んだという話なのです。お東とお西とで考え方が違ふのはどうかかなと思ふのですが、親鸞聖人の教えは死んでからの往生を教へてゐるのではないと思ふのです。

田中

櫟先生

西本願寺さんのことをとやかく云うのはよくないけれども、私は思うには西本願寺さんには清沢先生のような方が出なかつた。今でも徳川時代の教学者の教えを依り所にして教学が出来てゐる。そういうことだと思います。私も西本願寺さんの説教をいつも聞き

にいくわけではありませんが、インターネットででてくる西本願寺さんの学者のご意見を読ませていただいております。やっぱりあなたがおっしゃいますよう死後往生、おたすけはあくまでも命終わった後なのです。命終わった時に往生即成仏だというのが西本願寺さんのオリジナルな教えのようです。けれどもそればかりではないと思います。西本願寺系統の方もやはり曾我量深先生の教えを聞いてそれを領解している人もあり、批判している人もあります。まあいわゆる本願寺のオリジナルな教え方が東とは違うと認識しております。お葬式のことを還浄会げんじょうえとお西のほうでは云います。浄土に還ったという。私などは違うなあと思います。これは私などの力ではどうしようもない。どっちをとるかはその人の問題です。

司会

もうひと方がいいですか。

柳川

先生今日はありがとうございます。職場の問題などいろいろあるのですが、本当に親鸞聖人にいろんなことがあった。それこそ流罪などと先ほど云われました。いろいろそういうことがまた信心を深めていく縁になったということを改めて聞きまして、本当に自分が思いかけず今の職場につきまして日々いろんなことがありまして人間の姿というか、穢土、不平等な世界、その中心である我執を日々見せつけられて念仏せずにはいられないのです。自分の中にじゃあ私が念仏してどうなるのという疑いがあります。本当

に長い目で日々のいろんなことが、私が信心を深めていく縁にたぶんなるのだと私は思いました。

櫛先生

この間私が承ったところではあなたは今年還暦になられたと。昔で行ったら本卦還りほんけがえと
いって人間の長命は還暦だなどと云っていた時代があります。私などはそうなりますと、
あなたとふた周り年齢が違う。還暦というは昔は、これから隠居だなどと云いましたが
今ではそうじゃなくて還暦はこれからだと云うことでしよう。

柳川

精神病院の看護助手の一年生ですから、いろんな意味で本当に先ほど云われましたよ
うに精神障害、いずれ私たちも認知症になって、精神障害か知覚障害か分からないよう
な状態になっていく。いろんな患者さんからの言葉というのは本当にお前の後生の一大
事はどうなっているのかという問いなのだと思うのです。本当にその状態になったとき
に遅すぎますよね。自分がこれからどうなっていくの分からない不安だとか、老いてい
くと精神状態が変わる。うちの病院では薬、不安になれば精神安定剤とか薬でいろいろ
調整されるのですけれど、その調整がうまくいかないと皆、不安で不安でしょうがなく
ていろんなことを投げかけてきます。それはわたくしにとつて後生の一大事が明らかに
なっているかという問いとして私が受け止めて聞かせていただかねばならぬということ
に尽きると改めて思いました。

櫟先生 おっしゃるとおりです。それは還相回向げんそうえこうということを親鸞聖人が云われています。そ

の還相の根本は「如来が如より来生して」というように、真如から人間世界に言葉が分
かる如来となつて現れてくださつて浄土を願えと我々を強く目覚ませてくださる用はたらきそ
のものが還相です。ところが我々はなかなか世間のことは雑事だと思つて、還相回向だ
と了解できないのですが、親鸞聖人の還相回向の根本を聞かせていただきますと、自分
に都合の悪いことも如来が私に浄土を願えと強く云つていてくださることなのだとして解
できると思います。これは『教行信証』の「証卷」にあります。還相回向という従来
は死んでからこの世に還つて来て他を救ふことだと理解している場合が多いのですけれ
ど、そうではなくて如来がこの世に我々を目覚めさせる用はたらきをしてくださっている。そ
の還相回向の重さを親鸞聖人は感じておられる。還相回向のおかげで我々に往相とい
うことが成り立つ。我々に浄土を願うということが成り立つ。こういう具合に私は了解さ
せていただいております。

柳川 ありがとうございます。

櫟先生 時間になりましたのでこれで終わります。

司会 ありがとうございます。

あとがき

本書は平成十九年十月二十八日、第十七回報恩講における櫛暁先生のご法話の記録です。

三年後の二〇一一年（平成二三年）には宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が本山にて厳修されます。また、折りしも浄土宗では法然上人の八百回忌法要が同時期に勤まります。法要期間中は全国からご同朋が京都へ上山参拝し賑わうことが今から想像されます。五十年に一度という宗祖の大法要であるが故に、宗門では準備に余念がありません。ご修復事業も御遠忌を迎えるが故に報恩の事業です。又、宗門内における盛り上がるの一方、思想界においては『歎異抄』を基にした書物が次々と出版され、云わば、親鸞聖人ブームが内外に巻き起こりつつあるという現状を鑑みて、混迷する現代社会において親鸞聖人の指し示された世界に遇うことへの期待が高まっていると思わずにはおれません。しかしながら、ただのブームとして、或いは、御遠忌法要が大イベントとして消化される事業ということだけではなりません。

本書で櫛先生は『得道の人とはつまり浄土真宗という教えを实践され、自分が真っ先に救われ喜びの生活をしておられる方。文化科学としての学者の研究ということではなく、『大無量寿経』を真実の教えとして自分が受けて救われていく、また事実救われて喜びの生活をしていられる方

の代表者が親鸞聖人である。そういう意味で得道の人。道を得た人。道を得たというのは「ここに道あり」というだけではなく、その道を実践させていたでいて、たすかりましたということを明瞭にしてその喜びを多くの人に伝えてこられた人。』とお話しされております。つまり、自分が親鸞聖人のみ教えにご縁をいただいで、南無阿弥陀仏の救いを領かしていただき、喜び、同朋と共に喜び味わっているかどうか。宗祖がお出ましにならなかつたら自他共の救いはなかつたという意味において御遠忌を勤める、或いは、報恩講に参座する、仏法聴聞する。そういう問いかけなくして何も無いということを先生からいただきました。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様には、お役を快くお引き受け下さり感謝申し上げます。合掌

平成二十年十月二十六日

第十八回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎